FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol.67

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。



中央にない中大で、文学じゃないことをする文学部生

文学部人文社会学科フランス語文学文化専攻4年
北海道札幌啓成高等学校出身
林（はやし） 歩（あゆむ）

唐突ですが、『タイムトラベル中大125』によると校名の「中央」、どうやらミドル・テンプルに名の由来を持つ可能性があるそうです。今まで学生の中で言われてきた「東京の中心」に由来するという説もありつつ、資料が残っていないため真相は闇の中……。

とはいえ、ですよ。現代の視点で見ると、いくら中央線経由でほぼつながっているものの、都心キャンパスと1時間離れている「奥地」にある多摩キャンパスは「中央」なのでしょうか……。という疑問を抱いた1年生の私は、なぜか「みずから動ける範囲は近場ゆえに、都心も八王子も中央」という謎理論を組み立て都心でアルバイトを探し、現在は丸の内で働いています。片道40㎞です。

半ば「ダーツの旅」感覚で大学を決めた私がこのように寄稿するのはお恥ずかしい話ですが、この不可解さによってある意味「文学部生らしい」4年間になったので、それをご紹介できればと思います。



豊田〜有楽町、40㎞超えの定期券

文学じゃない文学部に属して

現在はフランス語文学文化専攻、俗に言う「仏文」に属していますが、入学当初は「英文」で言語学系を中心に勉強していました（今はほぼ忘れていますが）。当初は言語の分野から英国王室の影響を調べたり「日本英語」の体系化を試みたりということを考えていたのですが、フランス王室で面白そうなテーマを見つけ2年次に仏文へ専攻を変えて以来、ざっくりと「文化」をやっていると周囲には言いながら、憲法や行政法、歴史学などに手を出していき……。しまいには、西洋史学専攻の友人から「絶対止めろ」「手を出したら終わり」などと言われていたフランス通史を卒論テーマに据えてしまいました。私は卒業できるのでしょうか。

文学部といえば「文学」という印象が強いかと思いますが、私は文学など毛ほども知識がありません。ですので、くれぐれも私に「面白いフランス文学を教えて」などとは尋ねないように。逆を言えば、文学に触れずともそれ以外の分野を深めつつ4年間を過ごせるのが本学文学部の特徴かもしれません。法学部が移転により遠くなったことは大きな痛手ではありますが、13専攻1プログラムを抱えつつ他学部の授業も履修できるため、たとえば東南アジア関連について知りたい人が総合政策学部の授業に出入りしているなんて噂も耳にします（総合政策学部は東南アジア関連の授業が豊富）。

プログラムに手を出してみると

このような理由から、「入る学部を間違えた」などと指摘を受けるのですが、おそらくは2年次に私がプログラムに手を出したのが決定打であるかと思われます。

1年次までは「プログラムをいかに避けること」を旨としていたのですが、サークルでExcelを使い名簿を作っている中で「会員証を使って水戸黄門ごっこがやりたい」という話題になってしまいました。それを叶えるべく関数や差込印刷で頑張っていたのですが、どうにもならないということで涙をのんでマクロ（Excel内で使える自動化プログラム）に手を出してしまうわけです……。詳細は他に筆を譲りますが、マクロの作成は現代だとWebプログラムの入口として

も用いられていたりするものです。この便利さと仕組みを理解してしまったが最後、あれよあれよという間にホームページが完成し、サークル用アプリが生まれ、蔵書管理サイトができ、独自SSOを作り……（SSOについては調べてください）。今年度で卒業予定の身ですが、来年度からはこれらが生業となる見込みです……。文学部で学んだものとは？

とはいえプログラムと文学部、存外無関係でもないのです。プログラムにはいろいろと種類がありますが、私がやってきたWebプログラムは、よくニュースなどでも報じられるように設計や運用においてモラルが求められます。それを文学やほかの題材などをもとに学んでいくという意味では、ある意味文学部の学びは存外、現代に即した「実学」であるとも考える次第です。



友達と行ったタルト屋さん



みずから手掛けたサークルのエンブレム

こんなものが出来上がりました

「ホームページ作れる」と言ってしまったことから始まったサークル活動で、最終的に委員長まで上り詰め官僚的組織を作ったり、航空会社のアライアンスに憧れ全国規模の学生連盟を立ち上げたり……。そんなことをしていたら就活の面接で「管理職の目線で語りすぎ」とダメ出しを受けました。一方で、それを良さとして受け取ってくれた企業もありました。

最近の私は、バイト先の社割で買ったホールケーキを主食にするというふざけた、もとい健康を顧みない典型的な「ダメ生活」を送っているわけですが、そんな生活の中だからこそ得られる「思考」や「哲学」があったように感じます。もちろんこれをなぞることは推奨しませんが。

「中央にない中大で、文学じゃないことをする文学部生」という自己矛盾をテーマにした本稿でしたが、学びを得たという点では学生として筋を通せているのではないかと思う次第です。確かに理路整然としたモデルケース的4年間ではなかったとは思いますが、SNSなどを通じ「普通」が強固に形作られていく現代だからこそ、あえてその「普通」から外れた姿をご紹介することで、「普通」のかせの外し方の一例をご紹介できたならうれしい限りです。

学部だより

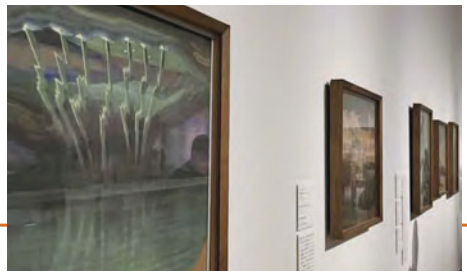
ご挨拶

曽根（そね）理子（りこ） 文学部事務室

ご父母の皆さま、はじめまして。今年度より文学部事務室に異動してまいりました、曽根理子と申します。私自身、2020年に中央大学法学部に入学し、最初の3年間は多摩キャンパス、最後の1年間はキャンパス移転に伴い、茗荷谷キャンパスで学生生活を過ごしました。当時はコロナ禍と重なり授業の多くがオンラインとなり、多摩キャンパスへ通う機会が限られていたこともあって、こうして大学職員となった今、改めて中央大学が持つ豊かな魅力や可能性に気付かされる毎日を送っております。

そうした日々のなかで私自身も学部の魅力を再発見している最中ですが、先日、文学部で導入している「キャンパスメンバーズ」を利用して国立西洋美術館を訪問いたしました。この制度は、大学教育において美術館や博物館を有効に活用し、学生や教職員が本物の芸術・文化財・歴史に触れる機会を増やすことで、豊かな教養や感性を育み、学びの場を広げることを目的としています。対象施設の窓口で学生証を提示するだけで無料または割引価格で利用できるため、本物に触れて感性を磨く素晴らしいきっかけになると実感いたしました。

中央大学ではこうした学外施設との連携に限らず、学生の皆さんの学びを実りあるものにするため、さまざまな支援体制や制度を整えております。その一環として、2026年度秋学期よりこれまでのC plusに代わる新システム「Campus Square（キャンパススクエア）」（仮称）の運用がスタートいたしました。今後はこの新システムを通じて履修や学生生活に関する重要な情報を随時発信してまいります。引き続き、ご子女が充実したキャンパスライフを送り、大きく成長できるよう最大限サポートしてまいります。何かお困りのことがございましたら、どうぞお気軽に文学部事務室までご相談ください。



キャンパスメンバーズを利用して訪れた国立西洋美術館